

## What Amy Reveals : Steinbeck's "Johnny Bear" in the Cultural Context

Fujisaki Mutsuo  
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/1355884>

---

出版情報 : 英語英文学論叢. 41, pp.73-82, 1991-02. 九州大学英語英文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

## Amyの暴くもの

### ——Steinbeckの“Johnny Bear”を 文化的コンテクストに置く

藤 崎 睦 男

これまでSteinbeckの短篇“Johnny Bear”は、他の作品との関連で時折言及される他は、心理学的方面への作家の興味や、登場人物のモデルに関する背景などが断片的考察の対象になるのみで、作品全体を纏まった形で取扱ったものはほとんど見当たらない。短篇であることに加え、作品自体が余りにも単純明解なストーリーであり、中心人物の中に読み込めそうな寓意性も、Johnny Bearの露骨過ぎる役回りのせいで、見え透いて来るのも、作品全体を解釈することが憚られた一因かも知れない。しかし、この作品も視点をずらせば新たな解釈が可能になる。それは、今まで普遍的と思われて来た文化的状況の中の現実を際立たせることによって、異常さを発見して行こうとする本論の意図するところでもある。

“Johnny Bear”はグロテスクな物語である。特に、この短篇の題名ともなり、通称Johnny Bearと呼ばれる男の醜悪さはその最たるものかと思われるが、実はこの物語の中で最後に明らかになる醜悪さに比べれば、物の数ではない。このことは作者さえも知らない。何故なら物語で明らかになる真の醜悪さは、作者が身を置く文化的状況の中では、見えて来ないからである。

作者は語り手の「私」によって、人間という範疇からはおよそかけ離れた「大きく、愚鈍で、ニヤニヤ笑う熊」(“a great, stupid, smiling bear”) (146)<sup>1)</sup>そっくりの人物の外見的醜悪さ・異常さを再三にわたり読者に印象づける。やがて、うわべは正常に見える人々の、この熊に似た大男を通して他人のプライバシーを覗き見するというもう一つの醜悪さが、明らかにされて行く。さ

---

1) 本論中、作品からの引用は、すべて“Johnny Bear,” in *The Long Valley* (New York: Penguin Books, 1986) による。引用文後の括弧内の数字は頁を示す。

らにこの覗き行為は、村の中心的存在であった貴族的女性の自殺の暴露という、思いもよらない方向へ向い、ついには村の社会構造の現実がグロテスクな姿であぶり出されるのである。

まず最初にロマ村の地理的状況が説明される。ロマ村の描写は単なる村の紹介にとどまらず、この社会が内包する二重性をも暗示する。

The village of Loma is built, as its name implies, on a low round hill that rises like an island out of the flat mouth of the Salinas Valley in central California. (143)

平地に島のように浮ぶ丘陵地帯に建てられたロマ村は、丘の頂上に教会を配し、その尖塔は“its spire is visible for miles” (144) と、村人の信仰の深さを辺りに誇示するかのようである。読者は、この西海岸の一寒村に、かつて彼らの遠い祖先が荒野を約束の土地にするため、自らの社会に課した“a city upon a hill”のイメージを重ね合わせることも可能であろう。しかし、続いて描かれる斜面に並ぶ庶民の小さな木造家屋と、それとは対照的に南の肥沃な土地の高い生垣に囲まれた、地主の家の存在によって、ロマ村はその希望的外観とは裏腹に、階級制度が存在し、先祖の描いた未来図からは程遠いものであることが暗示される。さらに、男達が夜毎訪れるバッファロー酒場の、深く沈んだ澱のような存在感によって、「丘の上の町」のイメージ自体がアイロニカルな響きを帯びてくるのである。

バッファロー酒場は、“Neither prohibition nor repeal had changed its business, its clientele, or the quality of its whisky.” (144) と、世の中の変遷にも関わりなく生き延びて来た。丘の頂上に屹立する教会の尖塔を、永遠の信仰心の証しとするなら、この酒場もまた時代の流れを越えて、人々の内奥深く根差した悪への傾斜を暗示しているかに見える。村の15才以上の男は誰もが、仕事が終るとかならず酒場に立ち寄って、一杯やりながらしばらく世間話をした後帰宅する。物語を流れる時間はすべて夜であり、夜の闇に囲まれ深夜まで男達がたむろする酒場はそれだけで罪を予感させるに十分である。さらにロマ村の精神的状況を示すものとして霧が効果的に使われる。夜になると湿地帯からわき上って来て村を覆いつくす陰湿な霧は悪徳の臭気を放ち、「私」が最初に Johnny Bear に出会った夜などは特に、悪魔の腕のように家々からみつく。

The night was nasty with the evil-smelling fog. It seemed to cling to the buildings and to reach out with free arms into the air. (152)

事態がさらに悪化した時には、丘の頂上の教会に向って、霧は蛇のように這い登って行く。

I saw the rags of fog creeping around the hill from the swamp side and climbing like slow snakes on the top of Loma. (157)

このように沼地から夜毎立ち上ぼって来る霧は村の精神的墮落と同時に、その破局の近いことを暗示するのである。ロマ村の人々は、時々思い出して丘の上に立つ教会の尖塔を仰ぎ見、日曜日には礼拝に出掛けることもあろう。しかし日常生活において仕事の疲れを癒し心理的安定を与えるのは、物語の主たる舞台のバッファロー酒場である。立前としての中心が丘の頂上にある教会であるのに対し、酒場は実質的な村の中心といえよう。人々は毎夜ここに集まっては、神の言葉のかわりに Johnny Bear の言葉を聞き、腐敗の臭いを放つ霧の中を家に帰るのである。

「私」が初めて Johnny を見たのは、メキシコ人との混血娘、Mae Romero と逢引きの後、いつものように酒場に立ち寄った夜であった。そこで、自分と Mae との逢引き中の会話を寸分違わずに、しかも声色まで全く同じに、演技して見せる異様な風体の男に驚くのである。やがてこの男は“a kind of recording and reproducing device” (162) であり、5セント銅貨を入れる代りにウイスキー一杯を飲ませるだけで自分が覗き見たものを正確に再現する再成マシンであることがわかる。友人の Alex は「私」に“the Buffalo is the mind of Loma. It's our newspaper, our theater and our club.” (156) と説明するが、実はこの酒場の中で人々の最も知りたい情報を伝え、同時に演じ楽しませてくれる者が Johnny であることからすれば、彼こそ“the mind of Loma” と言えるのかも知れない。人々は、一杯のウイスキーを彼におごってやるだけで、他人のプライバシーを覗き見ることができる。そして村の誰もが、そのグロテスクな姿を心の中では軽蔑しながらも決別できない Johnny こそ、ロマの人々のあくなき好奇心の具現化した姿であり、彼の肉体的醜悪さはロマの村人の精神的醜悪さに外ならない。

ロマの男達は、長く退屈きまりない一日の仕事を終え、酒場で酒を飲み

自制心を麻痺させ、Johnny Bear を利用し、他人のプライバシーを覗き見ることで精神の安定を保っている。この彼らの無気力さの最大の原因の一つは、ロマ村の文化的状況が内包する現実の不毛さにある。この事実はなによりもまず、「私」自身が従事する仕事の不毛さによって提示される。ロマ村の人々は、肥沃な土地を求めて湿地帯の干拓を試みている。その干拓の仕事を請け負った会社で働くのが「私」であるが、新しい土地を求めるという意味では、「私」も作業員達も、かつて広大な森林を伐採し、原野に鋤を入れながら営々として西へ向って進んで行った開拓者の末裔である。しかしながら、この仕事にはかつて高らかな賛美の対象であった開拓者精神のかけらすらも見い出せない。人々の関心はただ一つ、より多くの土地からより多くの野菜生産をめざすという経済効率の一点にある。ここで働く者は、かつて社会的束縛を逃れ大自然の中で冒険と友愛の人生を享受した独立自恃の開拓者とは異なり、浚渫会社の雇われ労働者に過ぎない。彼らの仕事は真夜中から始まり、絶えず事故に悩まされ、麻薬の売買さえも密かに行われている。そこにはみずみずしい原生林も、大自然との交感もなく、あるものはただ「黒い大藪草の沼地」(“a black tule swamp”) (143) であり、その沼地から浚渫船の上に層になって覆いかぶさって来る蚊の群との格闘である。そして沼から夜毎立ち昇って来る霧は、悪疫のように人々の心に侵み込んで行く。

the mosquitoes that hung in banks over the dredger and the heavy pestilential mist that sneaked out of the swamp every night. . . (143)

かつて大森林の中に響き渡った斧の音に替って、夜通し運転する浚渫船のディーゼル・エンジンの響きやバケツのぶつかり合う音は、村の中にまで侵入して聞く者の心を荒ませる。

I hated to go out into the damp night, and to hear far off in the swamp the chattering of the Diesel engine on the dredger and the clang of the bucket, . . . (146)

ここでは干拓(=開拓)地は人々を文明社会の緊張から解放する安全弁として働くのではなく、逆に漠然とした不安感と陰鬱な空気を村の中に充満させるのである。

前にも述べたように、Johnny Bear のグロテスクな姿は、村人のグロテスクな好奇心を表わしている。そして彼らは他人のプライバシーをのぞくことによって、日常的な欲求不満の解消を計っているのである。しかし、村人にとっての真の好奇心の対象は、Johnny によって次々に演じられて行く「私」とMaeの逢引きでも、肉屋と客のやりとりでも、母子喧嘩でもない。彼らが最も興味を持ち、その表面上のためらいにもかかわらず、容赦なく暴露したいという衝動に彼らを駆り立てるのはHawkins姉妹のプライバシーである。Emalin HawkinsとAmy HawkinsはAlexの言葉によれば、“our aristocrats, maiden ladies, kind people” (152) である。今はなき姉妹の父親は下院議員を務めた程の村の有力者で、彼女達は非難の余地のない家族の一員として“... , they're symbols. They're what we tell our kids when we want to ... describe good people.” (153) とみなされている。Hawkins姉妹の持つ象徴としての価値について、「私」は次のように考える。

A community would feel kind of—safe, having women like that about. A place like Loma with its fogs, with its great swamp like a hideous sin, needed, really needed, the Hawkins women. A few years there might do things to a man's mind if those women weren't there to balance matters. (156)

男達のアイロニカルなフロンティアとしての湿地帯と、そこから生じる忌まわしい罪にも似た霧に包まれるロマ村。そしてそのような村に住む男達の精神のバランスがHawkins姉妹によって保たれているという構図がここに見られる。姉妹の象徴としての価値に対する村人の態度は多義的で両面価値的なものである。何故なら人々は二人を村全体の手本として尊敬しながらも、同時にその私生活をのぞき込み秘密を暴き出すという偶像破壊的行為に喜びを見出しているのである。すなわちHawkins姉妹は、村人の両面価値的な対象となることによって、ロマの町の統合の中心として存在している。

姉妹は“ladies”として村人の尊敬を受けているが、その名前と呼ばれる限り社会的・文化的な創造物であり、一個の人格としては存在し得ない。彼女達の村の中での立場はその屋敷の外観が端的に物語っている。

Little of the house could be seen, for a high thick hedge of cypress

surrounded it. . . . Only the roof and the tops of the windows showed over the hedge. . . . The hedge was clipped square. It looked incredibly thick and strong. (154)

四角に刈り込まれ、厚く強固に生い茂ったイトスギの生垣に取り囲まれ、ほんの屋根と窓の上部だけしか外からは見えない屋敷は、完全な孤立化により、貴族的存在として村人には近寄り難い。しかし“The hedge keeps the wind out”という Alex の何げない言葉に対し「私」が“It doesn't keep Johnny Bear out.” (155) と答えるように、その孤立化ゆえ村人達の好奇心は募って行き、やがて Johnny の餌食となる運命にある。姉妹は、奉られそして暴かれるという両面価値的対象として、村人のオブセッションとなる。それは“ladies”に課せられた社会的役割なのである。

ロマ村の社会は女性不在の男中心の世界だと言っても過言ではない。理由の一つは、物語が男だけが集まる酒場を中心にして展開するからでもあるが、むしろ作者が女性を描く時の態度に最大の理由があるように思われる。「私」が部屋を借りている Mrs. Ratz は、家主として名前が言及されるのみであり、彼女の夫が酒場である程度の性格を持った者として描写されるのとは対照的である。また友人 Alex の妹も「私」が夕食に招待された時の料理人として言及されるのみで、読者には名前さえ知らされない。ただ例外的な者は、Hawkins 姉妹と Mae Romero だけであるが、この三人とて若干の具体性を持ってはいるものの、決して生身の人間としては登場しては来ない。むしろ Hawkins 姉妹と Mae Romero は、男性中心の社会の中で形成され、cliché 化した女性像の典型とも言える人物なのである。

Emerson は“Woman”と題するエッセイの中で“Women are. . . the civilizers of mankind. What is civilization? I answer, the power of good women.”<sup>2)</sup>と女性の社会的役割について述べている。Emerson がここで“good women”と称する女性は夫や子供達の為に家庭を守る白人女性であり、彼女達は社会的規範や徳を守り文明を維持する者として位置付けられる。他方、社会によるこのような位置付けから外れる女性を Dawn Lander は“White women who refuse to restrict their behavior to what society

2) Ralf Waldo Emerson, “Woman,” in *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson* (New York: AMS Press, 1979), Vol. XI, p. 409.

intends for them”と呼び、このような女性にとって、“separation from the male, and solitary wandering in the wilderness are considered equivalent to the fall.”と述べる。こうして、Landerによると“the traditional single female in the literature of the American wilderness is a promiscuous savage, black or Indian, or a white prostitute.”<sup>3)</sup>という固定化したイメージが生れたのである。社会的規範から外れた白人女性は、Hesterのように物理的にではなくとも、少くとも心理的に、“the wilderness”へと追放される。“good women”は文明を守り、侵犯する女性は荒野へ追放され、Dimmesdaleに対するHesterのように男の誘惑者へと墮落する。こうして女性は道徳的女性と不道徳的女性として二項対立的に固定化されたイメージの中に押し込められる。前者は貞淑な白人女性であり、後者は追放された白人女性の他にすべての非白人女性が含まれ、Nickのインディアン娘のように荒野で白人男性をなぐさめる役を担わされる。<sup>4)</sup>「私」が逢引きの相手として選んだ混血娘Maeが、不道徳な女性として描かれているのも、彼女が後者の系列に入るからに外ならない。Maeとの仲がJohnnyによって暴露された後、Alexは“If you’re worrying about Mae’s reputation, don’t. Johnny Bear has followed Mae before.”(148)と「私」に告げ、Maeが決して「私」一人を相手にしているのではない、“promiscuous”な女であることを同時に読者に知らせる。このことは作者自身の持つ文化的背景と無縁ではない。結婚以外で男性の相手をする女性は決して“good women”であってはならない。同時に男性は、相手が“good women”以外の女性であれば、自分の快樂を咎められることはないのである。

言うまでもなくHawkins姉妹は文明擁護者としての、Emersonの言う“good women”である。しかし、姉妹は単に家庭を守る貞淑な女という役割を越え、ロマ村という共同体全体の“good women”という存在にまでなっていて、男性社会が女性に与えた clichéとしてのイメージを、より鮮明に表わす状況を提供する。Hawkins姉妹は、“ladies”という文化的に作り上げられた枠の中に押し込められ“The community conscience”(161)として崇拜さ

---

3) Dawn Lander, “Eve among the Indians,” in *The Authority of Experience: Essays in Feminist Criticism*, ed. Arlyn Diamond and Lee R. Edwards (Amherst: Univ. of Massachusetts P., 1977), p. 199.

4) See Lander, p. 201.

れる。これは社会から不断に加えられる暴力に外ならない。崇拜が暴力であるという事実は、前にも述べたように、姉妹が村人の飽くなき詮索の対象であり、暴露され破滅する運命にあることから明らかである。

Hawkins 姉妹の人生は行住坐臥に不断の注意を払い、社会から課せられた叔女という役割から一步も踏み出すことができない。そして妹の Amy が自らの社会的役割に堪えられなくなって、走った行動の結果が妊娠であり自殺であった。Peter Lisca は作者がこの作品で意図したものを次のように要約している。

[The central interest is] the conflict between its [the social group's] innate curiosity and its desire to perpetuate the symbols of its decorum despite the further revelation by Johnny Bear.<sup>5)</sup>

Lisca が述べるように、村人の偶像破壊へ向う露骨な好奇心と、村の統合の中心としての象徴性を保持したいという願望との間の葛藤が中心となって物語は展開して来た。しかし、最後の、Amy の自殺という事実が暴露される直前に「私」が語るように、村人の飽く無き好奇心が結局は勝利をおさめるのである。

Now those men really wanted to know. They were ashamed of wanting to know, but their whole mental system required the knowledge. Fat Carl poured out a drink. . . . Johnny Bear gulped the whiskey. (163)

村人の“whole mental system”によって、暴力的に象徴性を担わされた Hawkins 姉妹は、最後にそれを剥ぎ取られる。それは村人自らの招いた結果とはいえ、彼らにとっても大きな痛手であった。Johnny が Amy の死が自殺によるものであることを暴露した後の酒場の人々の様子が、そのことを物語っている。

---

5) Peter Lisca, *The Wide World of John Steinbeck* (New Brunswick: Rutgers Univ. P., 1958), p. 96.

No one spoke. The men moved up to the bar and laid down their coins silently. They looked bewildered, for a system had fallen. (164)

しかし物語はここでは終らない。偶像としての Hawkins 家の権威の失墜によって、確かに村は統合の中心を失い、そのシステムは崩壊してしまった。しかし、このような結果は起るべくして起ったものであり、その執拗な詮索によって姉妹の象徴性をはぎ取ることに密かな喜びを見出していた村人達には、半ば予見されていたはずである。実は Amy の妊娠と自殺より以上にロマの社会にとって致命的な事実が残っていたのである。それは Amy の情事の相手が白人以外の男、すなわち中国人であったという事実である。Johnny がこの事実を暴露しようといつもの演技を始めた時、逸早く悟った Alex は猛然と Johnny に躍りかかり、暴力を行使してまで演技を止めさせようとする。この時の彼の狼狽振りは事の重大さを示し、それが自分達の飽くなき好奇心さえも立ち入る事を許さないタブーであることを示している。

自らが生活する社会の中では、逃げ道をふさがれていた Amy にとって、唯一残された道は白人社会の外に見出す外はなかった。彼女にとっては、それは社会の周辺部に存在する中国人労働者であった。Nick Adams がインディアン娘の Trudy と、そして「私」が混血娘の Mae と交渉を持ったように、Amy は中国人の小作人と交渉を持った。まさに Amy の行為は白人男性の行為の鏡像にすぎない。だが男は当然のこととしてその行為を認められ、Amy は自責の念から自殺へと走らざるを得ない。実はここに問題の本質がある。<sup>6)</sup> 作者が当時のアメリカ社会の現実を、正確に描こうとすれば、この問題は自ら姿を現わして来る。何故ならこれは文化と切り離せない、文化自体が内包する現実だからである。それは作者が気が付いているか否かには関係がない。むしろ同じ文化背景の中で育ち、文化的諸価値を当然の事として受け入れて

---

6) Lander は、“Fathers and Sons” にみられる Hemingway の racism と sexism を論じながら、Billy が Dorothy と Eddie の性的関係を暗示したことに対する Nick の殺人さえほのめかず過剰な反応について次のように述べる。See Lander, p. 207: “The racial and sexual barriers between Dorothy and Eddie, the white woman and the Indian man, are created and enforced by Nick, the white man. Dorothy’s attitude, whatever it may be, is not even considered.” そして、白人女性と非白人男性の性的関係に対する、白人男性の極度の嫌悪感、文化的かつイデオロギー的な現象であることを指摘している。

来た同時代の作家にとっては、この現実は見えて来ないかも知れない。

白人女性が非白人男性との交渉を持つということは、白人男性社会を震撼させるに十分な事件であった。Amy の行為は男性社会の中で作られた女性の cliché に反抗するものであり、彼女が意図したと否とにかかわらず、自らに加えられた醜悪なる社会的・文化的暴力に対抗する唯一の有効な手段だった。何故なら、彼女の行為は、女性を“good women”と“promiscuous” women の二種類に分類し、二者をたくみに使い分けることによって、男性中心の文化を維持し、同時に自らの行為のグロテスクさを糊塗し続けて来た社会の内包する矛盾を暴露するものだったからである。